

## 第 10 章

# 地域に戻れていない人の 震災後 1～3 年目の生活困難と戻り意向

同一対象者への翌年度調査



---

1 回目の調査では、「どの人も生活困難をかかえているはずだ」と思い、選択肢に「困難はない」をつくらなかった。アンケートでその問いに記入がなかった場合に、「不明」なのか「困難なし」なのかの判断がつかずに困った。

次年度の調査では、「困難なし」の選択肢を加え、かつ、困難点の変化をより明確にすべく、「1 年目」「2 年目」「3 年目」の困難点を把握しようとした。前年度の回答者を調査対象としたので、郵送にもかかわらず、回収率が高く過半数を超えた。しかし、生活困難点については、「1 年目」「2 年目」の困難点が、前年度の回答より少し低くなっていた。これは調査回答者が、時間とともに嫌なことも少しずつ記憶が遠のいているためと思われる、そのことがやはり癒しにつながっていくのだろうと感じられた。

---

前章でみたように「地域に戻れていない人へのアンケート調査」（第1回）を1996年11月に行った。本章は、その調査での回答者（同一対象者）に対して、翌年の1997年12月に再度行った調査（第2回）の分析である。調査の目的は、1～3年目で生活困難点はどのように変化しているのか、前年の調査以降の1年間でどれだけの人が元の地域に戻れているのか、今後どれだけ戻れる可能性があるのか、といった点を明らかにすることである。

さらに、復興住宅への入居・応募状況と入居しての評価、および現在の生活再建状況についても把握しようとしている。

第2回調査は、第1回目でも回答のあった全世帯422人を対象として、郵送により行った。宛先不明で34通が戻ってきたので、実質の調査対象は388世帯、回答者は231世帯、回収率は59.5%であった。これは前回の回答者を対象とした再度の調査のため、前回の回収率22.7%を大きく上回っている（表10・1）。

## 1 現在の住まいの場所と住宅

### 1・1 — 現在の住んでいる場所と住宅

現在の住まいの場所をみたのが、表10・2である。現在住んでいる場所は、「震災前の敷地」29件（13%）、「震災前と同じ地区」41件（18%）、「震災前と別の地域」161件（70%）となっている。

前回は調査を行った人のうち、この1年間で13%の人が震災前の敷地に戻っており、17%の人が近所に戻ってきていることがわかる。しかし、依然70%の人が別の地域に住んでいる。

表10・1 アンケート回収結果

	芦屋	神楽	二葉	須磨	計
サンプル数	178	65	59	120	422
宛先不明	14	6	5	9	34
有効配表	164	59	54	111	388
調査回収数	91	40	38	62	231
回収率	55.5%	67.8%	70.4%	55.9%	59.5%

表 10・2 地区別現在の住まいの場所

	件数 (%)			計
	震災前の敷地	震災前と同じ地区	震災前と別の地域	
芦屋	6 (6.6)	17 (18.7)	68 (74.7)	91 (100.0)
神楽	4 (10.0)	3 (7.5)	33 (82.5)	40 (100.0)
二葉	5 (13.2)	12 (31.6)	21 (55.3)	38 (100.0)
須磨	14 (22.6)	9 (14.5)	39 (62.9)	62 (100.0)
計	29 (12.6)	41 (17.7)	161 (69.7)	231 (100.0)

表 10・3 地区別現在住んでいる住宅

	件数 (%)								
	震災後購入した住宅	元の敷地に再建した住宅	震災後借りた住宅	元敷地や近くに借りた住宅	同居している	仮設住宅	その他	不明	計
芦屋	19 (20.9)	7 (7.7)	26 (28.6)	1 (1.1)	10 (11.0)	16 (17.6)	11 (12.1)	1 (1.1)	91 (100.0)
神楽	10 (25.0)	1 (2.5)	13 (32.5)	0	2 (5.0)	9 (22.5)	5 (12.5)	0	40 (100.0)
二葉	10 (26.3)	5 (13.2)	8 (21.1)	0	2 (5.3)	10 (26.3)	2 (5.3)	1 (2.6)	38 (100.0)
須磨	20 (32.3)	13 (21.0)	17 (27.4)	0	1 (1.6)	8 (12.9)	2 (3.2)	1 (1.6)	62 (100.0)
計	59 (25.5)	26 (11.3)	64 (27.7)	1 (0.4)	15 (6.5)	43 (18.6)	20 (8.7)	3 (1.3)	231 (100.0)

表 10・3 が現在居住している住宅である。現在の住宅は、「震災後借りた住宅」64 件 (28%)、「震災後購入した住宅」59 件 (26%)、「仮設住宅」43 件 (19%) が多く、「同居している」15 件 (7%) は少ない。

また、この 1 年間で 26 件 (11%) が元の敷地に再建している。

## 1・2 —— 震災 2 年後の住まいと 3 年後の住まいの関係

1996 年の調査以降 1 年間の住まいの変化をみたのが表 10・4 である。「元の敷地に再建」した 26 件は、震災後購入した住宅から 8 件、震災後借りていた住宅から 10 件、仮設から 3 件、その他から 3 件、同居から 2 件となっている。購入した住宅と借りていた住宅からが、ほぼ半々である。「震災後購入した住宅」の 59 件は、新たに借りた住宅から 8 件、同居から 7 件、仮設から 3 件、その他から 3 件となっている。以上が持家の動きである。

表 10・4 1996 年調査時の住まいと 1997 年調査の住まいの関係

件数 (%)

1997 年 1996 年	震災後購 入した住 宅	元の敷地 に再建し た住宅	震災後借 りた住宅	元の敷地・ 近くに借り た住宅	同居して いる	仮設 住宅	その他	不明	計
新たに購入し た住宅	38 (76.0)	8 (16.0)	2 (4.0)	0	2 (4.0)	0	0	0	50 (100.0)
新たに借りた 住宅	8 (10.3)	10 (12.8)	47 (60.3)	1 (1.3)	0	5 (6.4)	5 (6.4)	2 (2.6)	78 (100.0)
同居している	7 (30.4)	2 (8.7)	0	0	13 (56.5)	1 (4.3)	0	0	23 (100.0)
仮 設 住 宅	3 (5.4)	3 (5.4)	10 (17.9)	0	0	36 (64.3)	3 (5.4)	1 (1.8)	56 (100.0)
そ の 他	3 (13.6)	3 (13.6)	5 (22.7)	0	0	1 (4.5)	10 (45.5)	0	22 (100.0)
不 明	0	0	0	0	0	0	2 (100.0)	0	2 (100.0)
計	59 (25.5)	26 (11.3)	64 (27.7)	1 (0.4)	15 (6.5)	43 (18.6)	20 (8.7)	3 (1.3)	231 (100.0)

他方、借家の変化では、「震災後借りた住宅」の 64 件は新たに購入した住宅から 2 件、仮設住宅から 10 件、その他から 5 件となっており、仮設住宅からの移動が目立つ。

## 2 震災後 1～3 年目の生活困難点

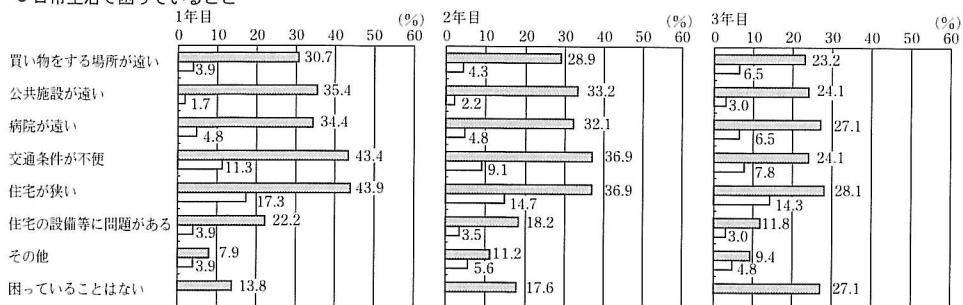
### 2・1 —— 全体でみた生活困難点

地域に戻れてない人の震災後の生活困難は一様ではない。時間の経過とともに精神的なことを含めて、問題がより深刻になっている場合が考えられる。

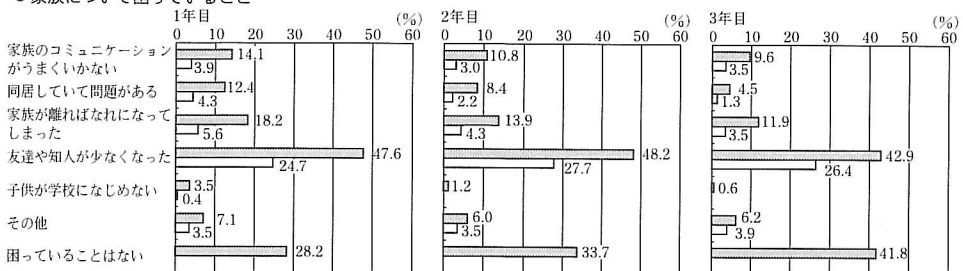
そうした点を考えて、生活困難点を、「日常生活で困っていること」、「家族について困っていること」、「仕事関係について困っていること」、「地域や健康について困っていること」の 4 つに大別し、時期は 1 年目、2 年目、3 年目の 3 時点を設定して聞いた。

また、困難点のなかでも問題に差があることが考えられることから当てはまる項目（多項目回答）と、とくに困る項目に分けて聞いた。全体でみた生活困難点を示したのが、図 10・1 である。

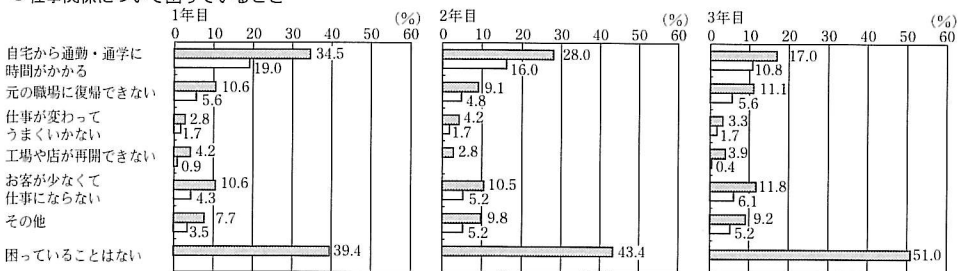
● 日常生活で困っていること



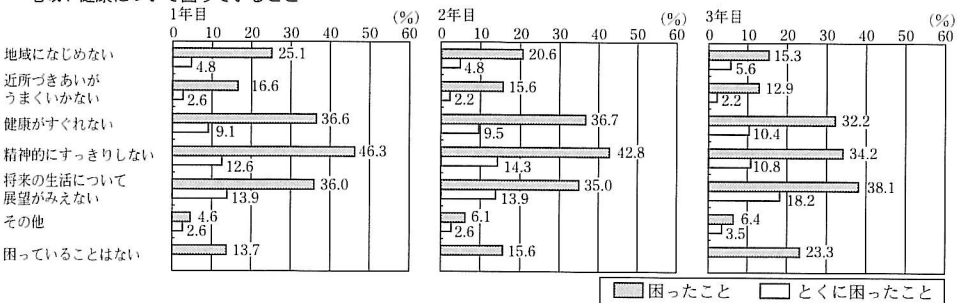
● 家族について困っていること



● 仕事関係について困っていること



● 地域や健康について困っていること



■ 困ったこと □ とくに困ったこと

図10-1 震災後1~3年の生活困難点

### (1) 日常生活で困っていること

日常生活では、年を追うごとに困っていることは少なくなっている。逆に「困っていることはない」が少しずつ多くなっている。しかし、「買い物をする場所が遠い」「公共施設が遠い」「病院が遠い」「交通条件が不便」「住宅が狭い」については3年目でも20%以上の高い困難率となっている。

### (2) 家族について困っていること

家族については、「友達や知人が少なくなった」が3年目でも40%以上と多くを占める。

### (3) 仕事関係について困っていること

仕事関係については、「困っていることはない」を除いたどの項目も年々少なくなってきた。ただ「お客が少なくて仕事にならない」が3年目に若干高くなる。

### (4) 地域や健康について困っていること

地域や健康については、「健康がすぐれない」「精神的にすっきりしない」「将来の生活について展望がみえない」の3項目については、年度差は少なく30%以上の高い困難率を示している。とくに「将来の生活について展望がみえない」については、年を追うごとに増えている。やはり、震災による精神面でのダメージは3年経っても癒されていないことがはっきりする。

## 2・2 —— 現在の住宅別にみた生活困難点

困難点の高かった「日常生活で困っていること」と「地域や健康について困っていること」を取り出し、現在住んでいる住宅のうち回答者の多かった、「震災後購入した住宅」、「震災後借りた住宅」、「仮設住宅」別にみる。

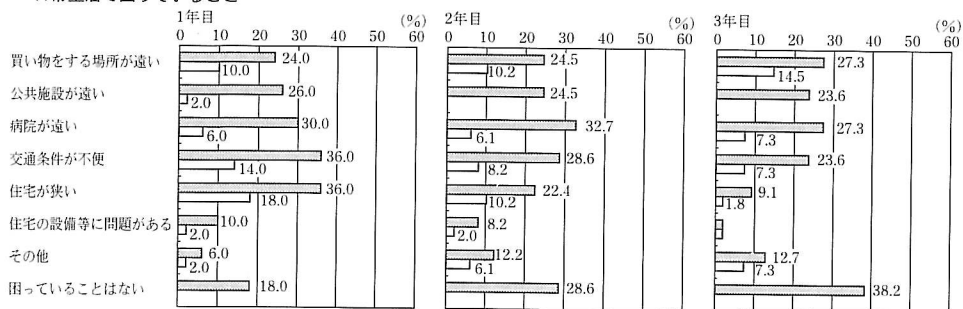
### (1) 震災後購入した住宅に居住している人

震災後新たに購入した住宅に居住している人では(図 10・2)、日常生活で困っていること、地域や健康について困っていること、ともに相対的には低い。

とくに日常生活で困っていることの「住宅が狭い」「住宅の設備等に問題がある」については、3年目で極端に低くなっている。これは住宅を購入したことで住宅の問題が解消された結果として端的に表れている。

しかし、生活の展望や精神的な問題はあまり改善がみられず、地域や健康に

● 日常生活で困っていること



● 地域や健康について困っていること

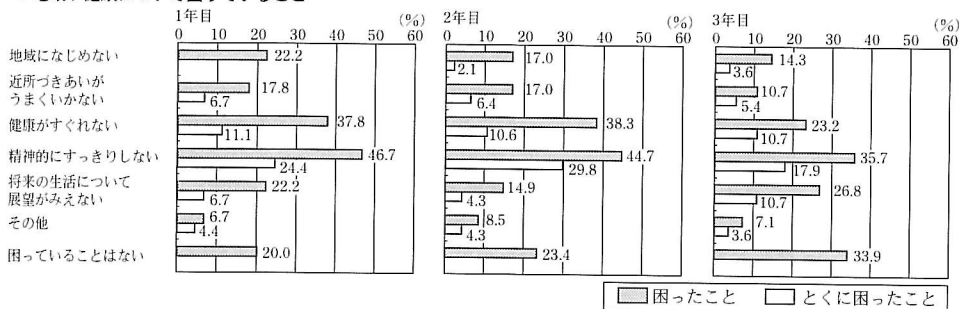


図10・2 震災後購入した住宅に居住している人の困難点

についての「将来の生活について展望がみえない」が3年目で高くなっている。

(2) 震災後借りた住宅に居住している人

震災後借りた住宅に居住している人でみると(図10・3)、震災後購入した住宅とほぼ同じ傾向を示している。が、日常生活では「住宅の狭さ」31%が高い困難率を示し、他の4項目についても20%以上になる。

地域や健康については、全項目が、「震災後購入した住宅」層より困っている比率が高い。

(3) 仮設住宅に居住している人

仮設住宅に居住している人では(図10・4)、日常生活での、「住宅の狭さ」、次いで「住宅の設備等に問題がある」が高い。これは仮設住宅の質の悪さを証明している。

地域や健康については、「健康がすぐれない」「精神的にすっきりしない」「将来の生活について展望がみえない」の3項目は、他の2つの住宅タイプよりも

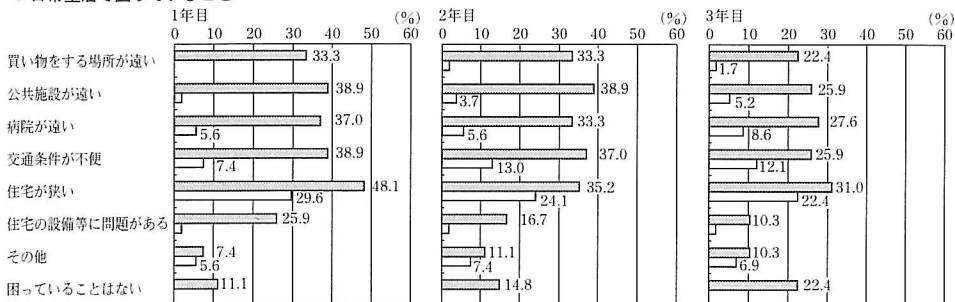
2倍程度高く、精神面での深刻さを表している。

「とくに困っていることはない」と答えた人が、日常生活についての項目で18%、地域や健康についての項目で8%だということは、逆にいえば「困難点がある」と感じている人は、それぞれ82%、92%いるわけで、より深刻である。

## 2・3——現在の生活でむしろ良くなった点

震災2年目の昨年の調査では、「すべての人が生活困難をかかえているだろう」と思い困難点だけを聞いた。しかし、震災後3年目でもあり、人々の生活

### ● 日常生活で困っていること



### ● 地域や健康について困っていること

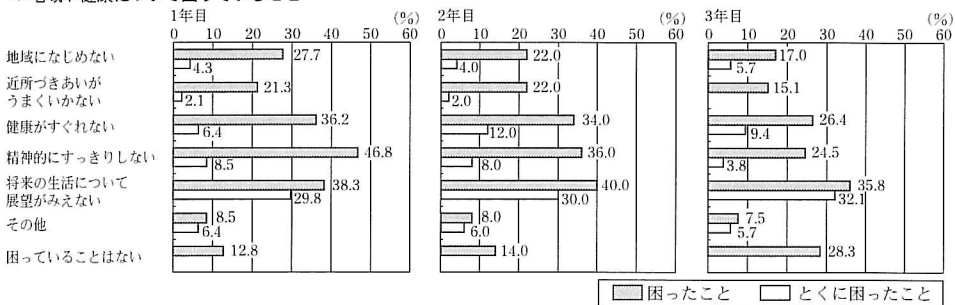


図10・3 震災後借りた住宅に居住している人の困難点

表10・5 震災後むしろ良くなった点

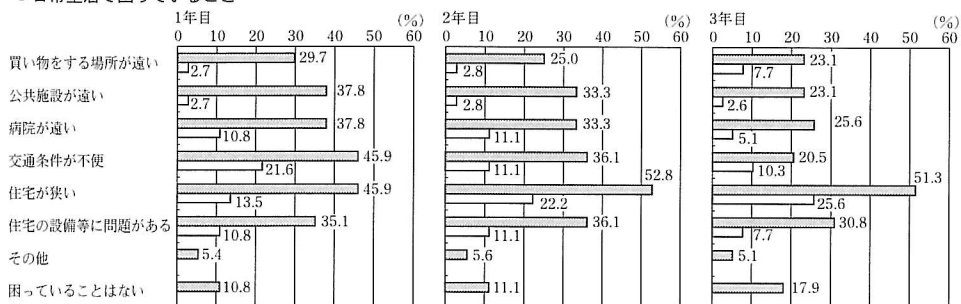
	公共施設が 近くなった	交通の便が 良くなった	病院が近く なった	買い物が便 利になった	住宅の事情 が良くなった	仕事うまく いくようになった	通勤・通学 が楽になった	店や工場が 軌道にのっ てきた	家族が一緒 に住めるよ うになった
件数	10	24	11	22	29	6	13	6	13
(%)	(4.3)	(10.4)	(4.8)	(9.5)	(12.6)	(2.6)	(5.6)	(2.6)	(5.6)



もある程度落ち着いてきたことから、この調査では、「むしろ良くなった点」についても聞いてみた（表 10・5）。

しかし、「良くなった点はない」が43%とやはり高い。良くなった点は、「家族の絆が強くなった」19%、「住宅の事情が良くなった」13%など、わずかである。現在住んでいる住宅の種類別にみると、とくに、「元の敷地に再建した」で「良くなった点はない」とする人が58%と多く、仮設住宅に居住する人より高くなっていることが特徴的である。

● 日常生活で困っていること



● 地域や健康について困っていること

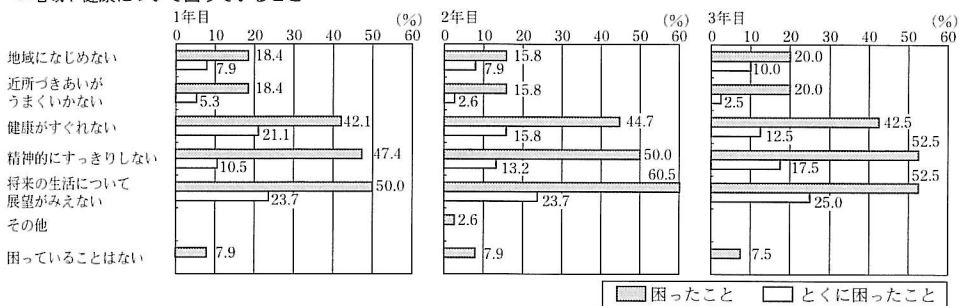


図 10・4 震災後仮設住宅に居住している人の困難点

M. A.

家族の絆が強まった	近所づきあいがより深くなった	友人や知人が以前より増えた	将来に希望がもてるようになった	体の調子が多くなった	その他	良くなった点はない	不明	計
43 (18.6)	19 (8.2)	19 (8.2)	4 (1.7)	15 (6.5)	10 (4.3)	99 (42.9)	9 (3.9)	231 (100.0)

### 3 元の地域への2年目以降の戻り意向

#### 3・1 —— 元の地域への2年目以降の戻り意向

今後どのように地域に戻れるかは、その人の生活再建にとっても、まちの復興にとっても重要である。今回の戻り意向をみると(表10・6)、「既に戻っている」41件(18%)、「戻るつもりである」41件(18%)、「戻りたいが戻れそうにない」66件(29%)、「戻らない」67件(29%)となっている。

前年度の調査での戻り意向と今回の結果を比較したのが表10・7である。前年以降に戻ってきた人(「既に戻っている」)は18%とあまり多くはない。それに対して、「戻れそうにない」は、19%から29%へ大幅に増えている。とくに、1年前には「いずれは戻りたい」と答えていた人が、「戻りたいが戻れそうにない」に変わっていることが特徴的である。こうした点から考えると、今後元の地域に戻る条件はより厳しくなることが考えられる。

表10・6 地区別にみた元の地域への戻り意向

	件数(%)					
	既に戻っている	戻るつもりである	戻りたいが戻れそうにない	戻らない	不明	計
芦屋	10 (11.0)	28 (30.8)	30 (33.0)	21 (23.1)	2 (2.2)	91 (100.0)
神楽	6 (15.0)	6 (15.0)	10 (25.0)	14 (35.0)	4 (10.0)	40 (100.0)
二葉	10 (26.3)	4 (10.5)	10 (26.3)	10 (26.3)	4 (10.5)	38 (100.0)
須磨	15 (24.2)	3 (4.8)	16 (25.8)	22 (35.5)	6 (9.7)	62 (100.0)
計	41 (17.7)	41 (17.7)	66 (28.6)	67 (29.0)	16 (6.9)	231 (100.0)

表10・8 元の地域に戻って感じたこと

	地域に戻れてやっと復興できた感じがする	安心して生活ができるようになった	やっと元の生活が取り戻せた	精神的にも余裕ができてきた	家族と同居できた	道路の整備などで以前より住みやすくなった	たまに震災時の恐怖を思い出してしまう
感じたこと	12 (29.3)	15 (36.6)	16 (39.0)	5 (12.2)	9 (22.0)	0	7 (17.1)
とくに強く感じたこと	6 (14.6)	9 (22.0)	5 (12.2)	1 (2.4)	3 (7.3)	0	1 (2.4)

### 3・2—— 地域に戻れて感じたこと

この1年間で地域に戻れた人に対して、戻れたことをどう感じているかについて多項目選択で聞いた（表10・8）。

「やっと復興できた感じがする」、「安心して生活ができるようになった」、「やっと元の生活が取り戻せた」と29%から39%の人が感じている。それに対して「震災の被害で地域が変わってしまった」という人が54%の多くを占めている。改めて震災被害の大きさを実感させられる。

### 3・3—— 元の地域に戻るための障害と戻らない理由

#### (1) 元の地域に戻るための障害

元の地域に戻りたいが戻れそうにない理由は「経済的に困難」が最も多く56%である。次いで「高齢のため」39%、「元の地域に復興住宅が少ないから」27

表10・7 前回と今回調査の戻り意向の関係

1997年 1996年	件数 (%)					計
	既に戻っている	戻るつもりである	戻りたいが戻れそうにない	戻らない	不明	
近々戻る予定	16 (69.6)	3 (13.0)	1 (4.3)	1 (4.3)	2 (8.7)	23 (100.0)
いずれは戻りたい	10 (12.5)	34 (42.5)	27 (33.8)	6 (7.5)	3 (3.8)	80 (100.0)
戻れそうにない	0	3 (6.8)	28 (63.6)	10 (22.7)	3 (6.8)	44 (100.0)
戻るつもりはない	4 (6.3)	1 (1.6)	7 (11.1)	47 (74.6)	4 (6.3)	63 (100.0)
近くに帰った	9 (69.2)	0	1 (7.7)	2 (15.4)	1 (7.7)	13 (100.0)
不明	2 (25.0)	0	2 (25.0)	2 (25.0)	2 (25.0)	8 (100.0)
計	41 (17.7)	41 (17.7)	66 (28.6)	68 (29.4)	15 (6.5)	231 (100.0)

件数 (%)						
復興事業のために住みにくくなった	震災前より近所つきあいが難しくなった	友人や知人が少なくなった	震災の被害で地域が変わってしまった	その他	不明	計
9 (22.0)	7 (17.1)	8 (19.5)	22 (53.7)	4 (9.8)	2 (4.9)	41 (100.0)
3 (7.3)	3 (7.3)	2 (4.9)	4 (9.8)	1 (2.4)	0	41 (100.0)

表 10・9 元の地域に戻るための障害（戻れそうにない理由）

	高齢のため困難	経済的に困難	地主家主との話し合いが見つからない	隣近所と話し合いが見つからない	土地の条件が悪く再建が困難	健康を害しており困難
理由	26 (39.4)	37 (56.1)	10 (15.2)	0	6 (9.1)	8 (12.1)
とくに強い理由	19 (28.8)	21 (31.8)	4 (6.1)	0	3 (4.5)	1 (1.5)

表 10・10 元の地域に戻らない理由

	今の生活に満足	高齢である	新しい家を購入	親や子供と同居するようになった	新しい仕事とうまくいっている	知人や友人ができた
理由	14 (20.9)	30 (44.8)	31 (46.3)	9 (13.4)	1 (1.5)	1 (1.5)
とくに強い理由	6 (9.0)	18 (26.9)	23 (34.3)	1 (1.5)	0	0

%で、戻れていない理由には階層性が表れている（表 10・9）。

## (2) 元の地域に戻らない人の理由

元の地域に戻らない人にその理由を聞くと（表 10・10）、「新しい家を購入」46%、「高齢であるから」45%が高い。次いで、「今の生活に満足」21%である。

## 4 復興住宅への入居意向と評価

### 4・1 —— 入居意向とその条件

元の地域に戻っていない人でどれぐらいの人が復興住宅に既に入居していたり、応募しているのだろうか。それをみたのが、表 10・11 である。

「入居・近く入居予定」16%、「応募中」5%、「応募したが当たらなかった」10%、の計 31%が復興住宅への入居意向をもっている。それに対して「応募するつもりはない」が 2 倍の 61%である。

地区によって復興住宅への入居意向は異なり、被害が大きく、借家層の多い神楽地区での意向が高い。

復興住宅に応募するにあたっての条件を多項目選択ととくに強い理由で聞いたのが、表 10・12 である。住宅の条件では「家賃の問題」48%、「住宅の広さ」

件数 (%)					
ほとんど知り合いがいなくなった	元の地域に復興住宅が少ないから	その他	障害はない	不明	計
3 (4.5)	18 (27.3)	11 (16.7)	1 (1.5)	2 (3.0)	66 (100.0)
0	5 (7.6)	10 (15.2)	1 (1.5)	0	66 (100.0)

件数 (%)					
精神的にも安定しているから	前の土地の条件が悪かった	戻ると震災のことを思い出す	その他	不明	計
3 (4.5)	8 (11.9)	8 (11.9)	11 (16.4)	2 (3.0)	67 (100.0)
1 (1.5)	5 (7.5)	1 (1.5)	9 (13.4)	0	67 (100.0)

表 10・11 復興住宅への入居・応募状況

件数 (%)							
	既に入居している	近々入居する予定	応募中	応募したが当たらなかった	応募するつもりはない	その他	計
芦屋	7 (8.6)	8 (9.9)	2 (2.5)	7 (8.6)	49 (60.5)	8 (9.9)	81 (100.0)
神楽	7 (21.9)	1 (3.1)	5 (15.6)	4 (12.5)	11 (34.4)	4 (12.5)	32 (100.0)
二葉	2 (6.1)	1 (3.0)	3 (9.1)	3 (9.1)	22 (66.7)	2 (6.1)	33 (100.0)
須磨	6 (10.5)	0 (0.0)	1 (1.8)	7 (12.3)	41 (71.9)	2 (3.5)	57 (100.0)
計	22 (10.8)	10 (4.9)	11 (5.4)	21 (10.3)	123 (60.6)	16 (7.9)	203 (100.0)

注：不明 28 件を除いている

表 10・12 復興住宅に応募する条件（とくに強い意見）

件数 (%)											
	元の住所に近い所	現在の住所に近い所	住宅の広さ	住宅の形式や階数	家賃の問題	周辺の環境	交通の利便性	買い物や病院の近さ	その他	不明	計
多項目選	28 (43.8)	4 (6.3)	22 (34.4)	7 (10.9)	31 (48.4)	13 (20.3)	25 (39.1)	18 (28.1)	6 (9.4)	8 (12.5)	64 (100.0)
強い条件	13 (20.3)	1 (1.6)	6 (9.4)	0	21 (32.8)	0	7 (10.9)	2 (3.1)	5 (7.8)	0	64 (100.0)

表 10・13 復興住宅に応募しない理由

	持家だから	所得制限の対象外だから	元の地域に知人・友人が少ないから	当選する見込みが少ないから	集合住宅に住みたくないから	その他	計
件数 (%)	86 (66.7)	6 (4.7)	1 (0.8)	3 (2.3)	3 (2.3)	30 (23.3)	129 (100.0)

34%が多く、住宅以外の条件では「元の住所に近い所」44%、「交通の利便性」39%、「買い物や病院の近さ」28%などが多い。強い条件でみるとよりはっきりする。経済条件である家賃の問題と住み慣れた元の地域という条件が大きい。

ここで前述した復興住宅を希望しない人の理由をみておく(表10・13)。「持家だから」という当然といえる理由が129人中86人(67%)と多い。所得制限の対象外だから、当選する見込みがないから、集合住宅に住みたくないから、といった理由は少ない\*1。

#### 4・2 —— 復興住宅入居者の評価

前項でみたように地域に戻れてない人で既に復興住宅に入居している人は22人と少ない。そのため復興住宅に対する入居者の評価は十分には分析できないが、入居して良い点、良くない点について参考的にみておきたい。表10・14、15が良い点、良くない点についての多項目選択および強い理由である。

復興住宅の良い点では、「住宅が新しくなった」64%、「住戸内の設備が便利」50%、日当たりが良くなった50%で評価が高く、「元の住戸より広がった」は32%である。「元の地域に近くなった」という人も23%ある。

逆に、良くない点では、「元の地域から遠くなった」41%、「高層に住むのが不安である」27%が多く、これらは強い理由でもあり、復興住宅の特徴を示し

表10・14 入居して良い点

										件数 (%)
	元の住戸より広がった	住戸内の設備が便利	住宅が新しくなった	日当たりが良くなった	元の地域に近くなった	買い物や病院に近い	通勤や通学が便利になった	周辺の環境が良くなった	良くなった点はない	計
多項目	7 (31.8)	11 (50.0)	14 (63.6)	11 (50.0)	5 (22.7)	4 (18.2)	3 (13.6)	2 (9.1)	2 (9.1)	22 (100.0)
強い理由	1 (4.5)	4 (18.2)	5 (22.7)	6 (27.3)	1 (4.5)	1 (4.5)	1 (4.5)	1 (4.5)	2 (9.1)	22 (100.0)

表10・15 入居して良くない点

										件数 (%)
	元の住戸より狭くなった	住戸内の設備が不便	高層に住むので不安である	日当たりが悪くなった	元の地域から遠くなった	買い物や病院が遠い	通勤や通学が不便になった	周辺の環境が悪くなった	悪くなった点はない	計
多項目	5 (22.7)	1 (4.5)	6 (27.3)	2 (9.1)	9 (40.9)	3 (13.6)	1 (4.5)	2 (9.1)	7 (31.8)	22 (100.0)
強い理由	2 (13.3)	0	5 (33.3)	1 (6.7)	5 (33.3)	1 (6.7)	0	1 (6.7)	0	15 (100.0)

ている。しかし、「悪くなった点はない」も32%と多い。

## 5 生活の再建と現在の生活状況

### 5・1 —— 生活の再建について

戻れていない人の家族にとって、現在どの程度まで生活の再建ができたのかを聞いた（表10・16）。

「ほぼ再建できた」69件（30%）、「かなり再建できた」39件（17%）、「あまり再建できていない」18件（8%）、「まだ仮住まいの段階」66件（29%）、「全く展望がもてない」16件（7%）である。全く展望がもてない層は少ないが、かなり再建できた層とまだできていない層がほぼ半々になっている。

現在の住宅別にみると、「震災後購入した住宅」、「元の敷地に再建した住宅」では、当然、ほぼ再建できた、かなり再建できたが大半を占める。「仮設住宅」では、まだ仮住まいの段階が77%と大半である。「震災後借りた住宅」でも3割の人が仮住まいの段階だと感じている。

表10・16 現在の生活再建状況

	件数 (%)						計
	ほぼ再建できた	かなり再建できた	あまり再建できていない	まだ仮住まいの段階である	全く展望がもてない	不明	
震災後購入した住宅	35 (59.3)	14 (23.7)	3 (5.1)	2 (3.4)	2 (3.4)	3 (5.1)	59 (100.0)
元の敷地に再建した住宅	12 (46.2)	7 (26.9)	2 (7.7)	1 (3.8)	1 (3.8)	3 (11.5)	26 (100.0)
震災後借りた住宅	13 (20.3)	12 (18.8)	8 (12.5)	21 (32.8)	4 (6.3)	6 (9.4)	64 (100.0)
元の敷地や近くに借りていた住宅	1 (100.0)	0	0	0	0	0	1 (100.0)
同居している	4 (26.7)	4 (26.7)	1 (6.7)	2 (13.3)	1 (6.7)	3 (20.0)	15 (100.0)
仮設住宅	2 (4.7)	0	1 (2.3)	33 (76.7)	5 (11.6)	2 (4.7)	43 (100.0)
その他	2 (10.0)	2 (10.0)	3 (15.0)	7 (35.0)	3 (15.0)	3 (15.0)	20 (100.0)
計	69 (29.9)	39 (16.9)	18 (7.8)	66 (28.6)	16 (6.9)	23 (10.0)	231 (100.0)

注：現在住んでいる住宅不明の3件は、内訳では除いている

次いで、震災後の生活再建に必要な公的な個人補償についてみる。「ぜひ必要である」56%、「必要である」27%、「あまり必要ない」1%、「必要ない」3%になっている。「ぜひ必要である」「必要である」をあわせると大半の人が必要と考えている（表10・17）。

## 5・2——生活状況（年収）について

最後に、アンケート回答者の属性を知るために、世帯全体の年収をみておく（表10・18）。

「300万円未満」29%、「300～500万円未満」29%、「500～700万円未満」12%、「700～1000万円未満」11%、「1000～1500万円未満」10%となっている。

現在の住宅別では、「震災後購入した住宅」では、500万円以上が54%と過半数を占める。これに対して「震災後借りた住宅」では、500万円未満66%が3分の2、「仮設住宅」は、500万円未満74%が4分の3と多い。当然ながら、持家

表10・17 公的支援の必要性

	件数 (%)						
	ぜひ必要である	必要である	あまり必要ない	必要ない	わからない	不明	計
件数 (%)	130 (56.3)	62 (26.8)	3 (1.3)	6 (2.6)	7 (3.0)	23 (10.0)	231 (100.0)

表10・18 現在の住宅別にみた生活状況（年収）

	件数 (%)							
	300万円未満	300～500万円未満	500～700万円未満	700～1000万円未満	1000～1500万円未満	1500万円以上	不明	計
震災後購入した住宅	6 (10.2)	18 (30.5)	11 (18.6)	10 (16.9)	11 (18.6)	0	3 (5.1)	59 (100.0)
元の敷地に再建した住宅	4 (15.4)	12 (46.2)	1 (3.8)	4 (15.4)	3 (11.5)	1 (3.8)	1 (3.8)	26 (100.0)
震災後借りた住宅	21 (32.8)	21 (32.8)	9 (14.1)	8 (12.5)	4 (6.3)	0	1 (1.6)	64 (100.0)
元の敷地や近くに借りていた住宅 同居している	0 (46.7)	1 (6.7)	0 (13.3)	0 (6.7)	0 (13.3)	0	0 (13.3)	1 (100.0)
仮設住宅	7 (55.8)	1 (18.6)	2 (9.3)	1 (2.3)	1 (2.3)	0	2 (11.6)	15 (100.0)
その他	4 (20.0)	7 (35.0)	1 (5.0)	2 (10.0)	2 (10.0)	1 (5.0)	3 (15.0)	20 (100.0)
計	68 (29.4)	68 (29.4)	28 (12.1)	26 (11.3)	23 (10.0)	2 (0.9)	16 (6.9)	231 (100.0)

注：現在住んでいる住宅不明の3件は、内訳では除いている



の人は比較的高収入で、借家、仮設住宅層の人は低収入で大きい差がある。

## 6 まとめ

- (1)現在住んでいる住宅は、「震災後購入した住宅」26%、「元の敷地に再建した住宅」11%、「震災後借りた住宅」28%、同居7%、仮設住宅19%である。前回から今回の調査までの1年間で、元の敷地に再建した人は26人であり、多くはない。元の敷地に再建した人の再建前に居住していた住宅は、「震災後購入した住宅」8件、「震災後借りた住宅」10件、「仮設住宅」3件などである。
- (2)環境の変化にともなう生活する上での困難点は、1年目では買い物が遠い、病院が遠い、部屋が狭いといった物理的な面に不満が多かったが、2年、3年と時間が経つにつれ精神的な面（将来に不安、友達がいない、病気がち等）での不満が多くなっている。とくに仮設住宅に住んでいる人は、多くの人が部屋の狭さ、精神面での不安を3年経った時点でも訴えている。
- (3)元の地域への戻り意向は、「既に戻っている」18%、「戻るつもりである」18%、「戻りたいが戻れそうにない」29%、「戻らない」29%となっている。前年調査と比較すると、「戻れそうにない」は、19%から29%へ大幅に増えている。とくに、1年前には「いずれは戻りたい」と答えていた人が、「戻りたいが戻れそうにない」に変わっていることが特徴的である。こうした点から考えると、今後元の地域に戻る条件はより厳しくなると考えられる。戻れない障害は「高齢」か、「経済面」を理由にあげる人が多い。
- (4)元の地域に戻れた人は、地域に戻って感じていることとして「やっと復興できた感じがする」、「安心して生活ができるようになった」、「やっと元の生活が取り戻せた」に3割台の人が回答している。しかし、他方「震災の被害で地域が変わってしまった」という回答が過半数あり、改めて震災被害の大きさを実感させられる。
- (5)元の地域に戻っていない人で復興住宅への入居意向がある人が3割、ない人が6割である。意向のない人の多くは、持家だからである。復興住宅への応募条件は、経済条件の家賃の問題と立地条件の元の地域という条件が大きい。

地区によって復興住宅への入居意向は異なり、被害が大きく、借家層の多い神楽地区での意向が高い。

(6)生活再建は、かなり再建できた人とまだ再建できていない人がほぼ半々である。しかし、仮設住宅では、大半が、まだ仮住まいの段階だと感じている。

注

- \*1 アンケート調査票の復興住宅に応募しない理由のカテゴリーの「元の地域に知人・友人が少ないから」は、誤りであり、本当は「元の地域に知人・友人が多いから」にすべきだったことを付記しておきたい。